

王の寵愛を受ける側近
の正体がカントだと知
った宰相に「この秘密
、陛下に伝えてほしく
なければ」と執務室で
毎晩脅される話

「ひっ……う、ん……っ♡」

ディートリヒの素手が、目隠しの下で何も見えないナシルの太腿の内側を滑り降りた。

五日目。もう数えなくても身体が覚えている。

「今日も濡れているな。まだ触れてもいけないのに」

乾いた声。書簡を読み上げるのと同じ抑揚で、ディートリヒは呟いた。

執務椅子の肘掛けに引っ掛けられた両脚が震える。下半身だけを剥がされ、上半身は侍従武官の制服のまま——その非対称が、屈辱を深く抉った。

「違……っ、これは——」

「否定する意味がない。五日分の記録がある」

ナシルの反論を遮る声に、感情はない。

指先がカントの割れ目に触れた。

「んう……っ♡」

奥歯を噛んだ。声を出すな。出せば負ける。出せばこの男の記録簿に「五日目、声が出るまでの接触時間」と書き加えられる。

——なのに。

ぬるり。指が割れ目を押し開いた瞬間、蜜が溢れて長い指を濡らした。

「初日は砂漠のように乾いていた。三日目から、触れるだけで滲み始めた。そして今日——触れる前から、椅子に染みを作っている」

「やめろ……そんな、報告みたいに言うな……っ」

「報告だ。お前の身体の変遷を正確に記述している」

指がクリトリスに触れた。突起を指の腹で円を描くように撫でる。緩急をつけて。ナシルの腰が椅子の上で跳ねた。

（——男なのに。俺は男だ。こんな場所を触られて反応するなんて、どうかしている）

「声を出せ、ナシル。出さなければ——」

「……っ」

「陛下への書簡を書く。今夜中に」

指が割れ目の中に沈んだ。一本。根元まで。

背中が椅子の背もたれに押し付けられた。目隠しの黒い布——ディートリヒの手袋——の下で、涙が一筋、褐色の頬を伝った。

（俺の身体じゃない。こんなの俺の身体じゃない。指一本で中が——溶ける——）

ずちゅ、と卑猥な音が暗い執務室に響いた。

指がゆっくりと出入りする。壁を探るように、一箇所ずつ確かめるように。

「五日前は指一本が限界だった。今は？」

二本目が加わった。ナシルのカントが——抵抗なく呑み込んだ。

「あ……っ♡……っ♡♡」

漏れた。声が。

「声が出たな。接触開始から三分。昨日より二十秒早い」

（この男は——俺の身体を帳簿のように管理している。それが一番屈辱で——一番、身体が震える理由を俺自身が分かっている）

指がカントの中で曲がった。前壁の、ざらついた箇所を探り当て——こすり上げた。

「ひ、う——っ♡♡」

脚が痙攣した。肘掛けに引っ掛けた膝がガタガタ鳴る。

「ここだ。お前は二十年間、自分の身体を知らずにいたな」

「知りたくなかった……っ♡ こんな場所、知りたく——」

「だが覚えろ。俺の指が教える」

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ。水音が規則的に響く。二本の指が前壁を擦り、そのたびにナシルの腹が震え、カントの奥から蜜が溢れて太腿を伝い、革張りの椅子の座面に滴った。

「今日は奥を探る。子宮口的位置を確認したい」

「やめ……そこは……っ♡」

「お前に拒否権はない」

声が、初めてわずかに低くなった。

「——この秘密、陛下に伝えてほしくなければ」

指が奥へ伸びた。カントの最奥——ナシル自身が一度も触れたことのない場所に、他人の指先が到達した。ぷにり、と柔らかい壁を指先が押した。

「ッ——あ……っ♡♡」

全身が弓なりに反った。頭の芯が白く弾ける。

「見つけた。ここだ」

指先が子宮口を押す。ぐ、ぐ、と圧をかける。

「やだ……っ♡ やだ、そこ押すな、あ……っ♡♡ 頭が……おかしく……っ♡♡♡」

涙が顎から落ちた。目隠しの布が涙でぐっしょり濡れている。

——その時。

部屋の外に、足音。

ディートリヒの指は止まらなかった。二本の指をナシルの中に深く埋めたまま、空いた手で机上の蝋燭を一本、ふっと吹き消した。部屋が一段暗くなる。

扉の鍵穴に——翡翠色の瞳が光った。

クロウズ・ハルトマン。夜回りの途中、宰相執務室から微かな水音が漏れ聞こえることに気づいた。鍵が閉まっている。深夜に。

鍵穴越しに覗いた先——蝋燭の残光の中に浮かぶ光景。

宰相の椅子に座らされた人影。褐色の肌。目隠し。制服の上半身と、剥き出しの下半身。大きく開かれた脚の間に——宰相の手が沈んでいる。

そして、その股間にあるのは。

男性器ではない。

クロウズの息が止まった。あの褐色の肌。あの黒い長髪。
——ナシル。

鍵穴越しに見えるナシルの身体が痙攣した。ディートリヒの指が子宮口を押し上げたのだ。堪えきれなかった細い声が、扉越しにクロウズの耳に届いた。

「あ……ん、ふ……っ♡♡」

胸の底から何かが弾けた。怒り。嫉妬。困惑。欲望。全部が同時に押し寄せて、クロウズの拳が石壁に叩きつけられそうになった。

——寸前で、堪えた。奥歯を砕くほど噛み締めて、音を立てず、その場を離れた。

だが脳裏に灼きついた光景が消えない。ナシルの開かれた脚。濡れたカント。宰相の長い指。あの、堪えきれなかった甘い声。

一方、執務室の中。

ディートリヒは何事もなかったかのように指を動かし始めた。

「今のは気にするな。鼠だろう」

「だ、れか……いたの……？」

「いない。——集中しろ。お前の身体のことだ」

三本目の指が加わった。カントが軋んだ。

「あ……あ……っ♡♡さん、ぼん……むりッ♡♡」

「入っている。お前のカントは、五日で三本を受け入れるまでになった」

三本の指がカントの中で蠢く。壁を押し広げ、前壁を擦り、奥の子宮口を突き上げる。ぐちゅ、ぐちゅ、と律動的に響く水音は、もう隠しようがなかった。

「六日目で潮を吹けるか、確認する」

「なにを……っ♡♡そんなの、知らな——」

指が加速した。短く鋭く、前壁を集中的に擦り上げる。

「ひ、ッ♡ひ、あ、あ——っ♡♡♡」

腹筋が波打った。椅子の上で身体が跳ね、肘掛けが軋む。快感が下腹部に溜まっていく。盆から水が溢れるように——限界に近い。

（だめだ——何かが——下から押し上げてくる——）

「出せ。俺の前で全部晒せ」

「やだ……っ♡♡いやだ、あ、ああ……っ♡♡♡」

指が最奥を突き上げた瞬間——

ぷしゅ、と音がして、ナシルの身体から透明な液体が噴き出した。ディートリヒの手を、袖口を、椅子の座面を濡らした。

「ッ——あッ♡♡♡ あああ……ッ♡♡♡♡」

全身が痙攣した。腰が浮き上がり、背が弓なりに反り、目隠しの下から涙が噴いた。

生まれて初めての潮吹き。自分の意志とは関係なく、身体が壊れるように液体を吐き出し続けた。

ディートリヒは指を抜かなかった。痙攣するカントの中で指を緩く動かし続け、最後一滴まで搾り取った。

「……五日間の成果だ」

ようやく指が引き抜かれた。ぬるり、と蜜の糸が指とカントの間に架かり、ぷつんと切れた。

「明日からは——挿入のフェーズに移る」

「……ッ」

声が出なかった。全身から力が抜け、椅子に崩れ落ちている。目隠しの布が涙で肌に張り付いている。

「六日目。接触から潮吹きまでの所要時間、十四分。記録する」

ディートリヒが手袋を嵌め直す衣擦れの音だけが、暗い執務室に残った。

＊

翌日。

謁見の間。ナシルは王エーデルの傍に立ち、南方の使節団に共通語で応対していた。流暢な通訳。完璧な所作。誰の目にも、王の側近は今日もいつも通りに見えただろう。

だが制服の下で、カントが疼いていた。

昨夜ディートリヒの指が子宮口を押した感覚が消えない。歩くたびに、まだ潤んでいるカントが布地に擦れ——甘い痺れが背筋を走る。

(……集中しろ。今は王のお傍に——)

「ナシル、顔色が悪いな。昨夜はしっかり休めたか」

エーデル王の声に、心臓が跳ねた。

「はい、陛下。……少し書類が溜まっておりましたので」

嘘だ。昨夜は宰相の執務室で、椅子に脚を開かされて指を三本突き込まれて、潮を吹かされていた。

その事実を、今こうして王の隣に立ちながら噛み殺している。

(俺は十三年、この方を欺いてきた。男として信頼され、側近に置かれて——この身体の秘密を、一度も明かさなかった)もし知られたら。

「異民族の寵姫」の噂は、ナシルにとって不名誉な陰口だった。だが同時に、身体の秘密を覆い隠す霧でもあった。「王と

肉体関係がある」と邪推されることで、逆に「ナシルは男だ」という前提は疑われなかった。

——その霧を、ディートリヒが晴らした。

逃げ道を頭の中で数える。

ディートリヒに従い続ける。王に自ら告白する。王宮を去る。ディートリヒを殺す。

四つとも、行き止まりだった。

＊

夕刻。兵舎の前を通りかかった時、階段にクロウズが座っていた。

普段なら「よう、ナシル！」と声が飛んでくる。明るい声、翡翠の瞳の快活な笑み。二年前からずっと、そうだった。

今日は違った。

クロウズは黙っていた。膝の上に腕を乗せ——ナシルを見上げる目が、異質な色を帯びている。

「……ナシル」

「何だ、副団長」

「お前——宰相に何かされてないか」

心臓が止まった。

血の気が引く。指先が冷えた。全身の毛穴が総立ちになる。

「何のことだ」

「昨夜、宰相の部屋の前を通った」

声が震えている。クロウズの声が。快活さが剥がれ、その下の剥き出しの感情——怒りと、痛みと、ナシルには名前をつけられない何かが——滲んでいた。

「——見たんだ」

「何を……見た」

「全部」

沈黙。

「お前が——カントだってことも」

ナシルの世界が、二度目に崩壊した。

膝が笑った。一步後ずさりかけた足が、石畳に縫い止められる。

クロウズが立ち上がった。二人の距離が縮まる。

「二年間……っ、お前のことがずっと気になっていた。王の寵姫だと思って手を出さなかった」

拳が白くなるほど握られている。

「——でも昨夜見たものは、寵愛なんかじゃなかった。あれは……あの宰相がお前を——」

「違う」ナシルは遮った。「違う。あれは——」

「黙れ」

クロウズの声が裂けた。

「聞いた。お前の声も聞いた。堪えてたけど漏れてた。——あんな声を、あの男に……」

「クロウズ——」

「俺がお前を守る。あの宰相から」

「守る必要はない。これは私の問題だ」

「お前一人でどうにかなる話じゃないだろう！ あの男は宰相だぞ！」

ナシルは踵を返した。振り返らず足早に去る。背中にクロウズの視線が灼けた杭のように突き刺さっている。

＊

夜。自室。

ナシルは寝台の上で膝を抱えていた。

もう二人に知られた。ディートリヒだけなら管理できた。あの男は理性的だ。脅迫に見返りがある限り、秘密を漏らす理由がない。だがクロウズ——感情で動く男だ。何をするかわからない。

(……どうする。どうすればいい)

何も思いつかない。

膝を抱えたまま、無意識に——股間に手が伸びた。布越しに。

その下で、カントが微かに熱を帯びていた。

五日間のディートリヒの「検分」が、身体に回路を刻んでしまった。触れてもいないのに。指の記憶だけで——潤み始めている。

(……気持ち悪い。こんな身体——)

だが嫌悪と同じ強さで、身体が「続き」を求めている。昨夜子宮口を押された感覚を、身体が覚えている。あの白く弾ける快楽を、もう一度——

(俺は、壊れかけている)

寝台に顔を埋めた。

明日の夜も、あの執務室に行かなければならない。

＊

六日目の夜。

執務室に入った瞬間、足が止まった。

部屋の配置が変わっていた。壁際にあった全身鏡——外国からの献上品——が、部屋の中央に移動されている。執務机の正面。蝋燭の灯りが鏡面に反射し、部屋を二つに映していた。

ディートリヒが椅子に座っていた。片手にワインのグラス。もう片手の黒手袋は、すでに外されていた。

「今夜は目隠しはしない」

表情が強張った。

五回の夜。目隠しだけが唯一の救いだった。見られている実感をほんの少しだけ薄めてくれる布。

「その代わり——全部見ろ。鏡で。自分の身体を」

「……なぜ」

「お前は二十年間、自分の身体を見たことがないと言った。
不健全だ」

ディートリヒが立ち上がった。ワインをテーブルに置き、
ナシルの前に立つ。銀混じりの暗褐色の瞳に、蠟燭の炎が揺
れていた。

「制服を脱げ。今夜は全部」

「……」

逆らえない。逆らえば——秘密が王に届く。

自分で制服のボタンを外した。ひとつずつ。手が震える。
上着が床に落ちた。シャツを脱いだ。褐色の裸の上半身が晒
された。平坦な胸。引き締まった腹。

「下も」

ベルトを外す。ズボンが落ちた。下着に手をかけ——指が
止まった。

「……見るな」

「見る。全て」

目を閉じて、下着を下ろした。

褐色の裸体が蠟燭の光に照らされた。肩甲骨まで届く黒髪
が背中に散る。細く長い四肢。男の骨格。男の筋肉。——そ
して股間のカント。褐色の肌の中で、そこだけがわずかに色
が違う。粘膜の薄桃色が、太腿の間で静かに主張していた。

「鏡の前に立て」

命じられるまま、全身鏡の前に立った。

正面に——自分が映っている。裸の自分。二十年間見ることが拒んできた自分の全身。

反射的に目を逸らした。

顎を掴まれた。ディートリヒの素手が、ナシルの顔を鏡の方へ向かせた。

「見ろ。逸らすな」

鏡越しに目が合った。怯えた琥珀の瞳と、乾いた灰色の瞳。

「今夜は、お前に自分の身体を教えてやる」

背後に立った。壁のように。背中にスーツの布地が触れる。

長い腕が太腿の内側に回り、脚を内側から押し広げた。鏡に映るカントが露わになる。

「ここがクリトリスだ」

指先が触れた。突起を、人差し指の腹でゆっくりと撫でる。

「五日で随分大きくなった。お前の身体は——俺に触れることに馴らされた」

「あ……ん、っ♡」

鏡の中で、ディートリヒの長い指がナシルの褐色の肌を滑り——カントの割れ目に沈んでいくのが見えた。自分の身体を自分で見ている。他人の指に開かれ、濡らされていく自分のカントを——

（こんなの見たくない。見たくないのに——目が離せない）